

くろつけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可  
平成二十六年二月一日発行（毎月一回一日発行）  
第二十卷十号（通巻第二三八号）

鈴



くろつけ

俳句雑誌

GLOCKE

第238号

2. 2014

番ひ雉

品川鈴子

初渦はまぶし瓊<sup>ぬ</sup>矛<sup>ぼこ</sup>の雫なる

飾鯛に捕られ王居ぬおのころ島

幼な友相次ぐ他界戻り寒

独り世に撒く豆はただ一抓み



飴絡め豆打ち鬼をまどはせり  
半世紀振りに沙汰あり春立ちて  
びよどり越舗道を歩く番ひ雉  
八十年前も淡雪我が呱呱に  
桃の咲く蔭に万葉乙女顕つ  
花山朱萸との連れ舞は紅枝垂



# 玉

# 鈴

# 吟

兵庫 松村 晋

鱈雲じやんけん負けて友背負ひ  
棟上げの声あぐ大工秋高し  
手をつなぎ老姉妹くる紅葉径  
小倉山紅葉に埋れ句は成らず  
ふるさとの水こそよけれ一茶の忌

東京 松本 アイ

皮ごとが美味しと大きなぶどう粒  
台風の見舞いついでの高電話  
団栗は踏みつぶされてランナー消ゆ  
独奏の蟋蟀今朝は力果つ  
足止まるサインは木犀雨じめり

愛媛 松本 恒子

よそゆきの笑顔となりし七五三  
禅寺の石の対話や石路の花  
空つ風送電塔のふんぼりて  
初時雨母の声鳴る古筆笥  
神還る心の空を見透かされ

愛媛 三浦 澄江

秋深し漢ばかりの職場バス  
紅葉寺別れし人の見えかくれ  
学僧を恋せし日もあり秋あざみ  
そぞろ寒手窪に碧き化粧水  
あいまいに生きては居らぬ石路の花

兵庫 水野 範子

池の上<sup>え</sup>にたわわ傾く残り柿  
新蕎麦の名人鼻毛まで白く  
喘ぎつつ萱りつきたる冬の湖  
物忘れ笑ひ飛ばして日向ぼこ  
柿の種吐き出し話ねんごろに

兵庫 水野 弘

北風隣家の大樹芽を醒ます  
鎌いたち里の街路樹芽を伸ばし  
街路樹や枝にまきつく鎌いたち  
波の花咲きて広がる瀬戸の海  
魯田に穂波震へる里の午後

香川 三橋 早苗

木曾路ではたわわに実る柿ばかり  
奥信濃 粧ふ山の発電所  
紅葉より垣間見えたる千曲川  
宿坊の女将新蕎麦腕ふるふ  
お朝事の内陣の僧息白し

茨城 三輪 慶子

露時雨靴紐かたく旅に出づ  
貴船川お火焚祭に出逢ひけり  
支へ合ふ小太り二人紅葉坂  
重なれる戦の歴史霧流る  
残菊の乱れしままに丈高し

埼玉 向江 醇子

野分去るアンパンマンの父も去る  
台風丸一日を籠りけり  
立冬のラジオは風の強さ告ぐ  
唯一の和室の障子柿の影  
客席の気配気になる文化祭

兵庫 村田とくみ

主逝き跡守る女僧紅芙蓉  
地藏盆塾と宿題すばしこく  
掃除機も鼻唄まじり涼新  
稲びかり卍巴の子だくさん  
茎三尺蕾の桔梗みな倒る

佐賀 森田 子月

押し寄せる毛布に辞書のLOVE探す  
古障子秋のうららに灼けし夜  
寄せ鍋の白菜が好きつみれ好き  
どうしても心という字夜は長き  
冬めいて障子の穴も花待てり

大阪 師岡 洋子

からすみや父との旅の一度きり  
手の甲におぼえなき傷芒原  
引き慣れて膨るる字引夜長し  
源義忌丈の揃ひし文庫本  
砂浜のしんと日を吸ふ冬初め

東京 安田とし子

針箱は菓子の空き缶一葉忌  
碧眼と俳談弾む夜の秋  
もう来ない今といふ今雁渡る  
銀杏散るレトロバス行く官庁通り  
職人の身軽き動作松手入

大阪 吉田 光子

パッカスの像丘に座すぶどう郷  
番犬の鎖引きずりぶどう棚  
見はるかす甲斐の山並み秋夕映  
初恋の詩うたの小径に野菊咲く  
星今宵奈良井の宿につごもりぬ

兵庫 明石 文字

ゆるゆると山茶花開き婚近し  
秋の暮 銚忘れし 植木 職  
華やげる 棕の黄葉に 氣付かされ  
吹きだまる 夜来の雨の 青落葉  
着ぶくれた 仔犬の前の カメラマン

愛媛 足利 鋤子

馴染の品形見に届く 秋日和  
介護士の 仮装行列運動会  
一葉忌友の形見は 朱泥・筆  
筋肉痛のいたみを知りし 秋深む  
家の中シルバーカーに頼る 秋

兵庫 荒木 治代

頑に生きて米寿の栗おこわ  
秋思濃し使ふことなき 夫婦箸  
軒寄する路地の家々つるし 柿  
紅葉晴杖の歩みの 機嫌良し  
行く秋の心に残る 句の一語

兵庫 荒木 稔

零余子飯妣の思はぬむかし 聞く  
筆塚の奥に 蟲塚もみぢ濃し  
自然薯掘り介護するやに 持ち上ぐる  
菊の鉢向きととのへて 選を待つ  
老どちは戦後をかたるに ぐり酒

大阪 居内 真澄

神風を信じ 愚かな開戦日  
擬装表示又と 眩やき 柚子の風呂  
タイマー切れ 冬至南京箸を 刺す  
緩キヤラも 二三がよしと 歳末市  
外つ国へ 帰る 空港 小春なり

大阪 池田 かよ

左手に書かれし 便り身にぞ 入む  
点滅の 赤色灯に 台風来  
ゲラ刷は 加朱にまみれて 灯親し  
背番号 1と手繋ぐ 七五三  
千両も 万両も 鴨容赦なし

兵庫 池田 久恵

お守りも 一緒に 洗濯神の 留守  
枯萩を 新品銚ためし 切る  
柿落葉絵になる 色を拾う 人  
忘れもの 多くなる 日々に 問う  
エプロンで 手を拭く 癖の 鍋出番

大阪 石橋 萬里

川霧が 青の 洞門 閉ぢ 込める  
十字架を 背負ふ 案山子 は 頭垂れ  
囲炉裏の間 魔除け 箒を 逆さ 吊り  
蟻螂の 三尺 跳びて 能舞 台  
威銃一発 筑豊 夜が 明ける

兵庫 市橋 香

和机の受験勉強白障子  
庭の花くつきり揺るる白障子  
七五三髪結ひし子のおちよぼ口  
冬晴の紺碧ひかる摩周湖  
七五三蝶ネクタイの大写し

愛媛 伊藤マサ子

文化の日明治を語る人もなし  
車窓より歓声あがる初紅葉  
紅葉の錦と言ふべし山纏ふ  
全山は紅葉黄葉照もみじ  
溪谷の瀬音の深し冬桜

大阪 井上あき子

快眠の朝はひときわ百舌日和  
ほんわかと夜明けの湯たんぽ妣の夢  
十七文字舌に転ばせ秋深む  
檀那寺より故郷の柚子宅急便  
潮干きし砂地に足跡鳥居まで

愛媛 今井 忍

祭好き女も樽酒酌み交わす  
祭鮓飽きたる子らに塩むすび  
玉垣に幟干されて祭果つ  
呆気なく逝きぬ出来秋見届けず  
金賞を胸に仰臥の捨て案山子

兵庫 岩木眞澄

武士屋敷武士の気とどめ石路の花  
時雨るるや芭蕉の庵偲びけり  
犬を見て犬に見られて枯野行く  
大粒の雨かとぞ聞く散る銀杏  
戻りなき白兔海岸石路の花

兵庫 岩崎可代子

旅半ば夫へ送らむ新走  
十三夜外す真珠のイヤリング  
今年酒下戸も寄り来て試し飲み  
靴裏に嵌る団栗道連れにあ  
あずさ号林檎撓わな駅掠め

兵庫 岩田登美子

ワイナリー出づれば甲斐は冬隣  
温め酒樽鈍箸に重かりし  
台風過濁流激し身延線  
秋高し富士山さがす甲斐の宿  
甲斐の山裾に育むぶどう棚

香川 齋部千里

陶窯の火を懐に山眠る  
木の香する木場の闇にてちちろ鳴く  
蜜柑狩り眼下に瀬戸の橋眺む  
小春日や蝶舞うごとく銀杏散る  
秋深き日の温もりや古書の市

# 鈴の奏

品川鈴子選

終電のスーツの背なのぬのこづち 大阪 山野美賛子

焦点に鷹を捉へて連写せり

初糶に甲羅測られ松葉蟹

兄妹の槍投げ遊び泡立草

俳句誌を添えて届きぬ今年米 兵庫 大西 和子

紙折りて分数説くや冬灯

拾い来し銀杏叩く夕厨

立冬や校歌で閉じる同窓会 福井 木曾 鈴子

免許更新高齢運転小鳥来る

満月の皓皓と照る原子の炉

柿たわわ高枝鋏振り回し

柿を挽ぐ梢仰てくらくらす 兵庫 遠藤 俊子

花ふきん縫目楽しむ秋の縁

大型ごみ出して愈愈冬支度

豚まんを片手に秋の中華街

秋画廊丁寧を書く芳名録 兵庫 西 和子

緋けば疑問解決月涼し

何事もなく過ぎし日に温め酒

鉢物に多過ぎる水秋の雨

運動会子猿の如く棒登り

息切れの段に木の実の弾みけり 兵庫 本木下清美

人住まぬ庭の芒が手招けり

年金のまた下りたる冬に入る

草紅葉ふらつく日日の庭歩き

団栗や帽子を脱げば土方焼け 香川 吉井 潤

初山に立つ煙突は陸蒸気

秋徽雨肉球冷えし猫帰る

向きになり椎拾い投げ老夫婦 兵庫 吉田 耕人

何たるや新酒の候に禁酒令

入院を告げられて聴く台風予報

点滴を引きずつて行く寒厠

病窓に小首傾げて小鳥来る 兵庫 木本 彦

冬に入りマラソンの帯一の谷

紅葉散る妙法院の庫裡高し

橋寺へ宇治の川霧茶の香り

詠み出でて宇治橋断碑秋深し

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川 鈴子 評  
四句 十句 岡 敏恵 評

\*選句は全て 品川鈴子

終電のスーツの背なのぬのこづち

山野美贇子

柿たわわ高枝鋏振り回し

木曾 鈴子

終電車までもよそ行きのスーツで意気投合したデート。  
それも普段着のセーターとかジャンパーではなくて、仕立  
て下ろしのスーツで会ってきた相手とはおそらく幸先の良  
い出会いであったと思われる。それを物語っているのは  
いのこづち、喫茶店で話したのではなくて気楽に寝転んで  
心を開いた長い時間があったのでしよう。

自分で何年前に植えたものがこんなに大きくなつて好  
物の柿をいっぱい成らしてくれたのでしよう。うれしく  
なつて高枝鋏を振り回してもなかなか枝に届かない。年配  
の婦人の勇ましさ。

豚まんを片手に秋の中華街

遠藤 俊子

紙折りて分数説くや冬灯

大西 和子

算数も分数になると段々難しく、得意な子とそうでない  
子に分かれてくる。それは父兄が多分教師経験があつて教  
え方が具体的で目に見える形で教えてあげることが肝心な  
のでしよう。立派な塾などに通わなくても家庭の寒々とし  
た一灯があれば十分。

「食欲の秋」とばかりに中華街へと出かけたなら、湯気を  
あげてふつくらと美味しそうな豚まんが目に入る。教育  
上、子育て中の方々には出来ない「歩き食い」も、この年  
ならちよつとぐらいお行儀が悪くても大丈夫と、一個買い  
求め、食べながら中華街を歩く。作者の笑顔が見えるよう  
な句だ。同時投句も明るく楽しい句が続く。

何事もなく過ぎし日に温め酒

西 和子

病窓に小首傾げて小鳥来る

吉田 耕人

陰曆九月九日から酒を温めて用いれば病なしという言い伝えがあつた。作者は、毎日が恙無く過ぎてゆくことに感謝し、秋冷えの夜に酒を温めて飲んだ。何が起きてても不思議ではない世の中、身も、心も温めてくれるお酒が美味しい。

息切れの段に木の実の弾みけり

本木下清美

冬に入りマラソンの帯一の谷

本木 彦

神社の石段だろうか。登って行く途中で息切れがし足を止めたら、こんころんと木の実が落ちて来て石段を転がってゆく。ああしんどと思つた時、がんばつてと励まされたような木の実の音。「弾みけり」という表現から、老齢を嘆くのではなく、元気で明るい気持ちしが伝わってくる佳句だ。

向きになり椎拾い投げ老夫婦

吉井 潤

病む母の菓子を欲しがると秋の蠅

増本 明子

ふと目にした光景から老人の気質を読み取つた句。散歩の途中に椎の実を拾いはじめた老夫婦が、おそらく十個ばかりは楽しみながら、しかし辺り一面の椎の実を見ていたら、いつの間にか向きになって拾っては投げ拾っては投げる。子供に戻るのか？向きになる頑固さなのか？それともこの老夫婦他に何か訳ありなのか？面白く不思議な句だ。

思いがけず病に倒れた作者は入院を余儀無くされた。病室の窓をぼんやり見ていると小鳥が来て窓辺に止つた。心配そうに小首を傾げている様子は、誰かの思いを伝えに来たかのような。一日も早く快癒されますように。

一の谷は神戸市須磨区の鉄拐・鉢伏の両山が海岸に迫る地域。北に鶴越がある。かつて源義経が平家の軍を攻めた古戦場に、今、マラソンの帯が続くのだ。学校行事の恒例のマラソンか、それとも市民マラソンか。作者はその列を眺めながら、昔、命がけの合戦があつたことに思いを馳せているのかもしれない。立冬の引き締つた空気が感じられる。

夏はうるさい蠅も秋になるとだんだん動きも鈍くなる。病床のお母様に差し上げたお菓子を弱々しくも寄つてくる蠅がいる。「欲しがると」という表現から、嫌われ者の蠅にもやさしい目差しを向ける作者の心が読み取れる。ご高齢のお母様を案じつつ、秋の蠅という季語に切なさが増す。

(以下略)

半歌仙「秋嶺や」の巻 五吟 渡部 葉月 捌

脇起半歌仙「田植糸」の巻 三吟 長谷川 鮎 捌

秋嶺や流れ滔々川の町

渡部 葉月

木の実降り継ぐ藍の工房

和田ひろ子

月の座の一会に訛飛び交ひて

水上 潤子

高速バスで賞にかけつけ

品川 鈴子

エトランゼ読みさしの本ポケットへ

井上久美子

働き蟻の羽根を引きゆく

ろ

鮎釣りの光に消ゆる竿の先

潤

綱渡りする空の真んなか

美

あの方の遺伝子欲しと横恋慕

ろ

ピンヒール脱ぎ忍ぶ階段

ろ

餓鬼を踏む広目天に睨まるる

月

狐火いづこ月渡る森

潤

美酒凍り李白を想ふ高樓に

美

筆致豊かに走る墨痕

ろ

阿波の国歎喜の歌の発祥地

潤

三宝柑の庭に香し

鈴

花吹雪迷子抱かれ母の胸

月

染めし卵を探すくさむら

美

田一枚植糸て立ち去る柳かな

松尾 芭蕉

水面に映る螢のワルツ

平田恵美子

玉手箱すつしり何の詰るらん

長谷川 鮎

昔を語る雁首並べ

恵

望月夜街の騒音しづもりて

恵

大皿に盛る枝豆に塩

鮎

老人会そろひの靴で登高す

山下 歌子

手をにぎりつつ天秤にかけ

恵

席替はり正面からは極く美人

鮎

王妃のダイヤ転売されて

歌

下向きの株取引きは半泣きに

恵

トンネルを出てまたもトンネル

鮎

そそり立つスカイツリーに冬の月

歌

財源もなき選挙公約

恵

雛僧は白い袈裟にて辻説法

鮎

勘亭流に墨のにほひも

歌

花咲きて又年輪を増やしゆく

恵

耕しすすむまつすぐな畝

鮎

平成二十四年十月二十一日

満尾 二十四年八月二十一日

（二十七回国民文化祭とくしま二〇二二）

（於ひよどり連句会KCC）

（文化交流プラザ）